

研究コミュニケーションとWeb

武田英明

総合研究大学院大学教授 情報学専攻/情報・システム研究機構国立情報学研究所教授

WWWのおいたちとその文化

WWW (World Wide Web) は情報公開のツールとして、もはやそれなしの世界を想像できないものになっている。WWWがCERN (セルン、欧州共同原子核研究機構) の研究コミュニティでの情報交換ツールとしてつくられたことはよく知られている。1990年代初めのことである。

当時でも、ftpサーバを使えば、研究者間でデータのやり取りをすることはできた。しかし、WWWはデータだけではなく、もろもろの情報をその場 (いつでも、どこでも) で見られるという便利さがあった。ことに画像を含むページが使えるようになって、利用者が爆発的に増えていった。

WWW初期のころから、研究者は自己紹介のページを公開するのが慣わしであった。そこには、研究データや発表論文だけでなく、連絡先、趣味、トピックス、所属する組織やグループへのリンクなどが載せられていた。ちなみに下の写真は、私の1996年ごろの個人ページである。

考えてみると不思議なことである。単に情報交換のためならば、詳細な自己紹介など要らない。データや論文だけで十分なはずである。にもかかわらず、多くの研究者が慣れないHTMLをテキストエディタで一所懸命に

書いて、個人ページを公開していたのである。ということは、個人ページは情報交換のためではなく、コミュニケーションのためにつくっていたということであろう。私自身もそのころ、論文の著者としてしか知らない海外の著名な研究者の個人ページを発見し、趣味や近況を読んで親近感を抱いた覚えがある。

その後、WWWは急速に一般の人に普及していった。しかし当初は、研究コミュニティのもつオープンな文化がそのまま持ち込まれていたため、個人ページの情報が格好の悪用されやすいターゲットになった。その危険性が指摘されるようになり、オリジナルの個人ページ文化はだんだんとすたれていった。それでも、研究コミュニティには依然として個人ページの文化が残っており、多くの研究者が自分の個人情報を公開している。もちろん、全体から見れば少数派ではある。

Webコミュニケーションの多様化

現在はどうであろうか。WWWはふたたびコミュニケーションツールとして注目されている。なかでも普及が著しいのがブログ (blog、weblogの略) で、そのほかにSNS (social networking serviceの略) やWiki (ウィキ) がある。

ブログは、いわば日々追加される日記風のWebページで、たいていは専門のツールあるいはサービスを通じて公開されている。ブログの人気は高く、総務省の調査によれば、2005年9月末現在、国内では474万人が使っている。ブログはアメリカで生まれ、ジャーナリズムの新しい手法として注目されてきた。一方、日本には、アメリカでブログが流行する前から、「Web日記」というジャンルがあり、日記を公開する文化が一部にあった。したがって、日本でのブログの流行はアメリカのようなジャーナリズム先行型文化の移入ではなく、Web日記文化の発展型という色合いが強い。

ブログの基本的な機能は各個人が日々情報を書き込んで発信するものであるが、それだけではなく、書き手と読み手のコミュニケーションを促進する仕組みを備えている。その一つはコメントを入れる機能である。もう一つは「トラッキングバック」というユニークな機能で、ブログユーザ (ブロガーと呼ばれる) が別のブロガーのブログ記事をリンクすると、そのリンクをはったということ



筆者の1996年ごろのWWWページ。もっと前から個人ページをつくっていたが、保存されていなかった。これはInternet Archive (<http://www.archive.org/>)で最古のものを探してきた。

が元の記事の方にも分かるという仕組みである。順リンクをはると逆リンクが形成され、ある記事に対するほかのブロガーの意見が一览できるというわけである。ブロガーたちは、このような仕組みを通じてWeblog Communityと呼ばれる緩やかなつながりをもつことが多い。

また、ブログには匿名性という興味深い特質がある。書き手は自分の名前を明かす必要がなく、ニックネームのみのブロガーも多い。名前が分からなくても「著名」なブロガーがいたりする。これは、書き手の名前ではなく、継続的に更新されるコンテンツそのものが信頼されている故である。

一方、SNSは、ユーザ間の関係を軸にコミュニケーションを促進するものである。各個人が自分の知り合いを登録していき、その知り合いのネットワークを使って、新しい知り合いを見つけたり、情報を交換する。SNSも日本では流行していて、前述の調査では399万人のユーザがいるという。SNSも日本では、本名ではなくニックネームなどで登録していることが多い。

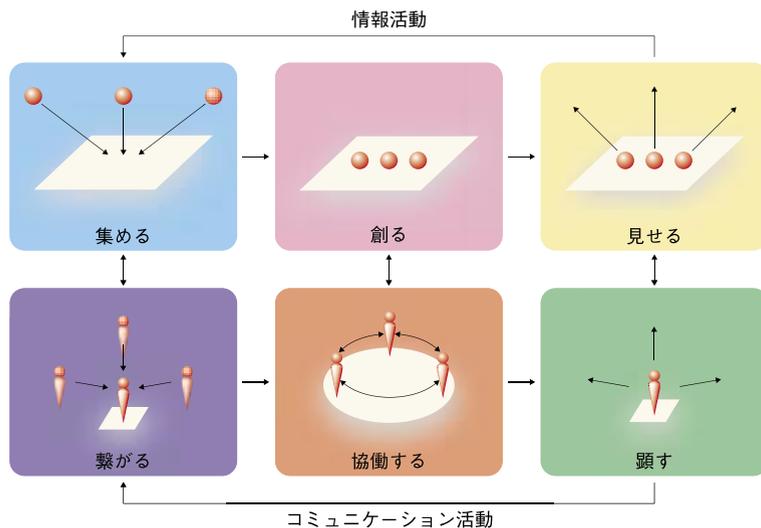
Wikiとは、複数人で手軽に更新できるWebを実現する仕組みで、近年、コミュニティサイトの構築などでよく使われている。リンク先の有無を意識せずにコンテンツを追加できたり、ページの履歴が保存されているなど、複数人が共同でWebページをつくるときに便利な仕組みが含まれている。

求められるコミュニケーションサービスの形

これらの多様なコミュニケーションを体系立てて考えてみよう(右上図)。情報の流通全般を「情報活動」と呼ぶことにする。情報活動は、情報を「集める」、「創る」、「見せる(公開する)」の三つに分けることができる。これらに対応するユーザの関係を「コミュニケーション活動」と呼ぶことにする。コミュニケーション活動は、人と人が「繋がる」、一緒に作業を行い「協働する」、人に自らを「顕す」という三つの活動からなる。

WWWは基本的に「見せる」ための技術であるが、HTMLエディタなどによる「創る」活動と、googleなどの検索エンジンによる「集める」活動とが組み合わさって、ネットワークを使って情報を操作する活動が成り立っている。これに対してブログは、「創る」と「見せる」が一体化した情報活動が基本となっている。さらに、先に述べたように、繋がりをつくる、繋がりを求めるという行為がブロガー間で行われている。その意味では「繋がる」と「顕す」活動が含まれており、コミュニケーション活動を取り込んでいる点がユニークである。

SNSは反対にコミュニケーション活動に特化し、「繋がる」と「顕す」を基本にしている。また、Wikiは1人で「創る」活動に特化しつつ、複数で創る「協働する」をシームレスにつないでいる。



情報活動とコミュニケーション活動の関係

このように、今求められているのは情報活動とコミュニケーション活動を包括的につなぐサービスである。

社会に向けたコミュニケーションツールの構築を

翻って、研究者のコミュニケーションはどうあるべきか。研究者同士のコミュニケーションは以前からWWWと電子メールを通じて行われてきた。ところが、研究者コミュニティは善意のコミュニティであって、今日的な悪意のあるユーザを想定しなければならないインターネットでは、研究者の文化は発信しにくくなっている。ブログやSNS、Wikiなら、研究者コミュニティの文化を保つことが可能であり、それらのコミュニケーションに置き換わっていくことが予想される。

もっと重要な問題は、研究者と市民とのコミュニケーションをどうするべきかである。新しい科学技術がもたらす社会へのインパクト、科学技術予算に対するアカンタビリティ(説明責務)など、多様なコミュニケーションが必要とされている。しかし、その必要性については研究者誰もが同意するだろうが、それに関わる時間と労力を考え、二の足を踏む人が多いことだろう。

ここで述べてきたような新しいコミュニケーション技術は、これまでより少ない時間と労力で効果的なコミュニケーションを実現してくれる。また、実名でのコミュニケーション活動に躊躇している研究者にとっては、ブログでの匿名コミュニケーションは心強いツールになるであろう。考えてみれば、名前ではなく「コンテンツ」で信頼されるというのは、研究の本来のあり方でもある。

科学技術に関して玉石混交の情報が氾濫する現在、何らかの方法で信頼できる情報を提供するのはいわゆる責務であろう。現在、多様な方法が提案されている。それを活用して、あるいは必要ならば新しい方法を提案してでも、信頼できる情報を発信していくべきである。

